

# 『チャイニーズ・リポジトリ』 (1832-1851) の版本問題

—東洋文庫モリソン文庫所蔵第一版と第二版に基づいて—

蘇 哲 誠

## I. はじめに

1832年にアメリカ人宣教師によって創刊された『チャイニーズ・リポジトリ』(*The Chinese Repository*, 1832-1851) (以後、『リポジトリ』と称す)は中国で二番目に発刊された西洋人による英字雑誌であり<sup>1</sup>、1851年に廃刊されるまで、当時東アジアにおける多くの「東洋研究者」<sup>2</sup>が寄稿された。『リポジトリ』への投稿は漢籍を直接翻訳して引用することが比較的多いのみならず、寄稿者の現地での実体験を含め、当時最新の東アジアの情報、例えばアヘン戦争、南京条約、望厦条約なども多く記載している。そのため、この雑誌は当時ないし今日の東洋研究にとって、貴重な知識と資料の情報源の一つであると考えられる。

月刊誌としての『リポジトリ』は、1832年5月から1851年12月まで一度も中断せずに出版され続けた。そして第20巻の廃刊に伴い、目録である『General Index』<sup>3</sup>も出版された。20年の間、編集者が幾度も交代されたり、雑誌の欄目やスタイルも編集者の判断によって少しずつ修正されたりしたことがあったが、雑誌の目的は、まさに第1巻第1号の序に書かれているように、「中国に関する外国書籍を回顧し、〔中国で〕すでに起きている変化に注目し、その変化がいつどこかで起きているかを可能な限り見分けて、それが事実であるかどうかを区分する」<sup>4</sup> (角括弧〔〕は引用者、以下同様)、と正しい中国の情報を西洋に発信するものであったことが変わらなかった。

この雑誌に対して、例えば王樹槐は、「この雑誌の中からアヘン戦争前後に関する多くの貴重な史料を見つけることができる」<sup>5</sup>、と評価している。また、エリザベス・L・マルコム (Elizabeth L. Malcolm) と顧鈞・楊慧玲もそれぞれの文章においては、この雑誌が初期入華プロテスタント宣教師の見聞と態度を記載しているため、一次資料として清代中国研究にとって「見過してはいけない」<sup>6</sup>、「特別重要な意義を有する」<sup>7</sup>資料であると議論している。

一方、アヘン戦争前後の中国を研究する際には、『リポジトリ』が貴重な資

料であるとみなされているが、雑誌の出版と内容に関するイデオロギー的な問題点を見落としてはならない。例えば上述のマルコムは、

「ところが、全ての虚飾を除いて、『リポジトリー』の目的は実際にイエズス会の著作に伝えられてきた中国に対する好印象を減らし、西洋にこの国の墮落の本質およびこの国がどれほどキリスト教を切迫に必要としているかを示すものである。『リポジトリー』のプロパガンダは、中国人を満たすために作られてきたキリスト教の作品と比べると微妙に異なる部分があるかも知れない。しかし事実上、『リポジトリー』は西洋宣教師によって出版されたものである。また、その投稿者は商人と宣教師たちである。しかも、雑誌の出資者は敬虔な商人である。その事実は必然的にある偏見や誤解をもたらしてくる。」<sup>8</sup>

また、

「総じていえば、商人と宣教師の目標は一致している。二つのグループは同じく西洋に中国を開放することを望んでいる。(中略) この二つのグループは同じく多くの先入観を持って中国にやって来て、自身の優位性を確信し、宣教であれ自由貿易であれ、中国をそれらの独特の哲学に改心させることを決心した。一般的に、彼らが獲得した中国知識は、学術的な興味からによるものでなく、単にそれらの目的を促す手段として求められたものである。」<sup>9</sup>

と指摘している。

今までの『リポジトリー』に対する研究は、雑誌の内容、運営、廃刊の経緯など多様な成果をあげてきた<sup>10</sup>。ところが、『リポジトリー』の文献学的な問題、即ち雑誌が運営していた当時、すでに第一版(First Edition)<sup>11</sup>(図1)と第二版(Second Edition)(図2)という二つの版本が存在している問題について、既存の研究は両版本の印刷と内容の差異に対する留意が不足している<sup>12</sup>。更に、下記の通り、版本問題に対する不注意により、近年一部の『リポジトリー』の復刻版においては、底本の版本の確認に困難が生じる問題がみられる。

ここで注意すべきは、『リポジトリー』には第二版が存在しているものの、20巻全巻が第二版として再版(revised)されていることを意味しない、という点である。結論から言うと、『リポジトリー』が運営していた当時、第二版として再版されてきたのは第1巻から第3巻までの3巻である。また、第4巻は増刷(reprinted)されたことがあるが、印刷の様式と内容の変更がなされなかった。

そして、第5巻から第20巻までは、再版と増刷がなされなかった。更に、版本問題の他に、月刊誌としての『リポジトリー』が出版される際には、毎月出版の「単行本」と単行本をまとめて出版する「合本製本」、という二種類の印刷形態があるという問題がある。

そのため、本稿は東洋文庫モリソン文庫所蔵の二種類の『リポジトリー』、即ち第一版と「単行本」が含まれるコレクション<sup>13</sup>や、第一版と「単行本」が含まれないコレクション<sup>14</sup>に基づき、まず、『リポジトリー』の再版経緯と東洋文庫モリソン文庫所蔵両版本について紹介する。次に、両版本の内容を比較して論じる。最後に、『リポジトリー』の版本問題とその影響について検討する。

図1 第1巻（第一版）の表紙

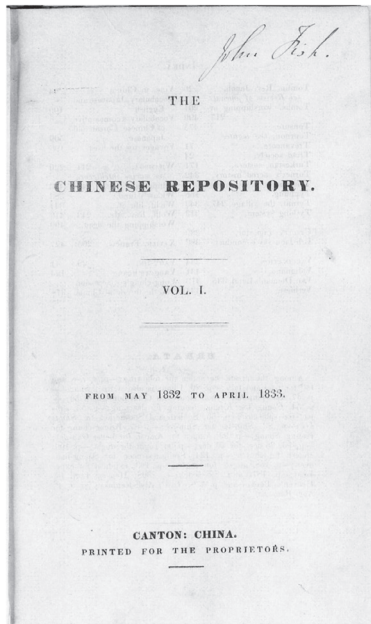
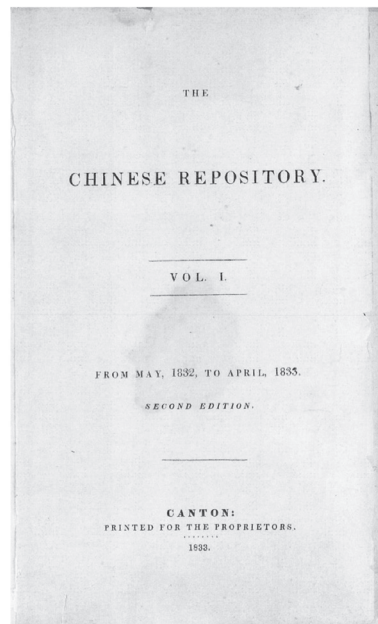


図2 第1巻（第二版）の表紙



## II. 『リポジトリー』の再版経緯と東洋文庫モリソン文庫所蔵両版本について

『リポジトリー』の第5巻によると、第1巻の発行数は400冊、第2巻は400冊、第3巻は800冊、第4巻は1,000冊、第5巻は同巻第4号出版の時点で予想の発行数が1,000冊である<sup>15</sup>。この数字から見ると、雑誌の発行量は決して多いとはいえない。

しかし、発行数が増加している傾向から見ると、これは東洋情報をもたらした『リポジトリー』の需要が拡大しつつあると考えてもよい。この問題について、第3巻第1号(1834年5月)の同月に、『リポジトリー』の編集者の一人であるサミュエル・W・ウィリアムズ(Samuel W. Williams, 1812-1884)は彼の父親宛の手紙に、「もし『リポジトリー』が再刊(repub[lished])されるべきならば、複数の巻を一つにまとめ、多数の比較的重要でない文章を除去する方がよい」<sup>16</sup>、と述べている。翌年に、『リポジトリー』の定期購読者は500人にのぼった<sup>17</sup>。購読者の需要を満たすために、上記のように、第3巻を800冊、第4巻以降を1,000冊、と発行数は上げられた。

1835年6月、ウィリアムズは、「私たちは15冊の第1巻と、数多くない第2巻の『リポジトリー』しか在庫していない」<sup>18</sup>、と述べている。『リポジトリー』の在庫減少に対応するために、翌年の1836年に、もう一人の編集者であるイライジャ・C・ブリッジマン(Elijah C. Bridgman, 1801-1861)は、「私は『リポジトリー』をアメリカで再版することを望んでいる。もしそれが叶えられるならば、再版された一部の第1巻は私たちのところに送るべきである」<sup>19</sup>、と述べている。1837年4月に、『リポジトリー』の第二版の第1巻と第2巻は、当時アメリカ海外宣教組織の中国における宣教事業の支持者であり出資者であるアメリカ人商人のD・W・C・オリファント(D. W. C. Olyphant, 1789-1851)に任せようとする、という記録が残されている<sup>20</sup>。これは即ち、第1巻と第2巻の第二版は1837年前後にアメリカ人商人オリファントが参画したことがあると推測できる。

ところが、後述するように、『リポジトリー』の印刷、特に漢字活字の利用に関して、第二版の印刷には『リポジトリー』の印刷所(以後、カントン印刷所と称す)に所有されている漢字活字が利用されたことがある。そのため、第二版の出版地はアメリカより、むしろカントン印刷所の所在地である中国(即ちカントン、またはマカオ)の方が可能性が高いである。また、『リポジトリー』の第二版に関して、それはブリッジマンとウィリアムズらの編集者が修正された内容をオリファントに再版を任せたものか、それとも編集者を經由せずにオリファントが内容を修正して再版されたものか、ウィリアムズとブリッジマンの書簡と報告書などの記録においては残さなかった。

そして『リポジトリー』の版本問題に関して、再版されたのは第1巻と第2巻のみならず、第3巻も含まれている。1851年に出版された目録である『General Index』の編集前記(Editorial Notice)において、ブリッジマンとウィリアムズは、「雑誌の発行数(The number of copies)は約1,000冊である。そのうち最初の3巻は第二版として出版されたことがある」<sup>21</sup>、と述べている。そして、ウィリアムズののちの回想によると、「『チャイニーズ・リポジトリー』、20巻、〔すでに発

行したのは] 合計 23,000 冊、その中に第 1 巻から第 4 巻までのリプリントも含まれている」<sup>22</sup>、とされている。

しかし実際に第一版と第二版の内容を比較すると、第二版の第 1 巻と第 2 巻の表紙においては明らかに「Second Edition」が印刷されている。そして第 3 巻（図 3 と図 4）では「Second Edition」という表記が両版本とも印刷されなかった。しかし後述の通り、両版本の第 3 巻の印刷と内容を比較すると、第 3 巻も第二版であることが確認できた。また増刷である第 4 巻に関して、東洋文庫モリソン文庫所蔵の二種類の『リポジトリ』を比較すると、両者の組版と内容は一致しているとも言える。

図 3 第 3 巻（第一版）の表紙

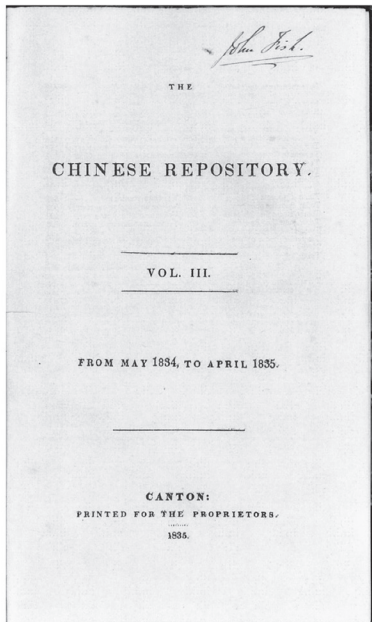
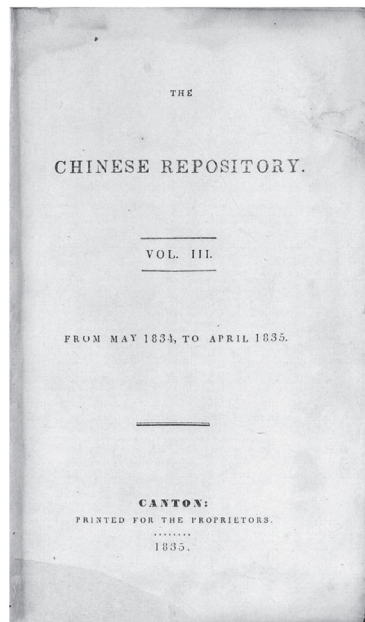


図 4 第 3 巻（第二版）の表紙

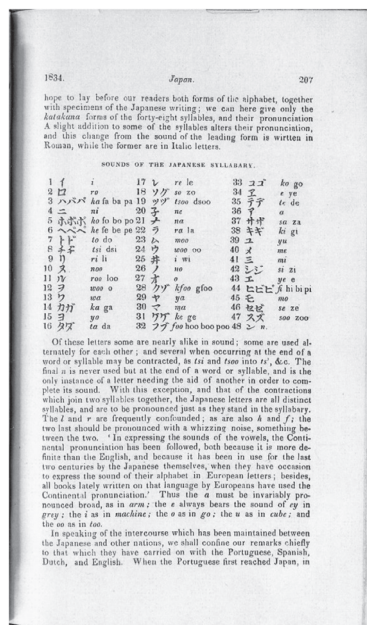
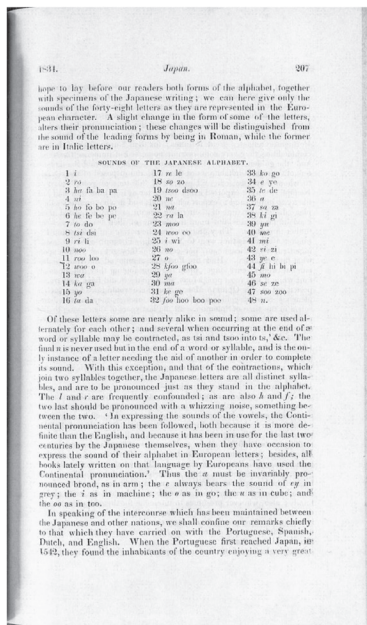


ところで、第二版の第 3 巻の出版年と出版地に関しては、留意しなければならないことがある。1837 年前後再版された第 1 巻と第 2 巻と異なり、第二版の第 3 巻には、編集者のウィリアムズが 1848 年にニューヨークで鋳造され、カントンに持ち運ばれた日本語活字が利用されたことがある<sup>23</sup>（図 5 と図 6）。これは即ち、第 3 巻が再版されたのは早くとも 1848 年、またはそれ以降のことである。更に、第 1 巻と第 2 巻の理由と同様、カントン印刷所所有の日本語活字が利用されたことにより、第二版の第 3 巻の出版地もアメリカでなく、中国の方が可能性が高いと考えられる。そして、第 3 巻が再版された経緯に関しては第 1 巻と第 2 巻と同

様、それが編集者による修正か、それとも編集者を經由せずオリファント、あるいは他者による修正か、ウィリアムズとブリッジマンらの編集者の書簡と報告書などの記録においては残さなかった。

図5 第3巻第5号(第一版)、207頁

図6 第3巻第5号(第二版)、207頁



話を東洋文庫モリソン文庫所蔵の『リポジトリー』に戻すと、『リポジトリー』は英語雑誌であるため、購読者も主に欧米人である。それゆえ、今日東アジアに残されている『リポジトリー』は欧米と比べて、比較的希少であると思われる。

戦時中の日本で、当時東洋文庫主事である岩井大慧(1891-1971)は『リポジトリー』の希少性と重要性を提起し<sup>24</sup>、東洋文庫モリソン文庫所蔵の『リポジトリー』を復刻し、丸善を通じて出版した。その復刻版に対して、宮澤真一は、

「戦中日本で、復刻英語版の第一号を出版して、15巻までで中断した。この戦中復刻版には、特異な一面がある。東洋文庫所蔵の同誌第二版を定本に復刻するにあたり、複数の執筆者が、年度ごとの各巻につき、二百頁前後の『支那叢報解説』を執筆して、別途15冊で発行していることだ。解説の仕方は各巻執筆者ごとに異なるもの、単なる翻訳であったり、概要だけに終わっていない。人物に関する伝記を調査研究して解説に加えるなど、今日的にも研究資料として益するところが多い。更に、

雑誌論文の学術的・歴史的評価を加えている点、関連する内外の資料も併せて指摘している点、全巻にわたる関連記事のクロス・レファランスを怠っていない点など、優れた解説書となっている。」<sup>25</sup>

と評価している。宮澤の説明通り、「15巻まで」の復刻英語版『リポジトリ』<sup>26</sup>と「別途15冊まで」の『支那叢報解説』<sup>27</sup>、その日本国内の出版は終戦までである。そして東洋文庫モリソン文庫所蔵の二種類の『リポジトリ』の由来について、岩井は、

「私〔岩井大慧〕の関係してゐる東洋文庫には、その初版本と再版本と二揃を備付けてゐる。世間では一揃も中中得難いといふのに、二セットは贅澤だとお叱りを蒙るかも知れぬが、どんな本でも、版を重ねるごとに買ふといふ立前は、モリソン文庫（ジョージ・アーネスト・モリソン George Ernest Morrison と言って、編纂者のモリソンは全く関係はない、東洋文庫の前身の蒐書家の名である）以来の傳統であるから仕方がない。」<sup>28</sup>

と説明している。また、丸善の復刻版の底本に関して、岩井は、

「今回複印の底本となるのは、丸善が襲藏してゐる再版本を以てあてることになってゐるさうである。これは初版よりは、行と行、字と字との間隔が少しゆとりをとって、幾らが読みよくなってゐるし、その上初版本では、漢字の挿入が慣れなかつたことにもよらうが、少なかつたのを、再版本ではこれを殖してゐる等、いろいろの點から、再版本の方がよいといふ見地からである。これは至當を考へ方で良策である。」<sup>29</sup>

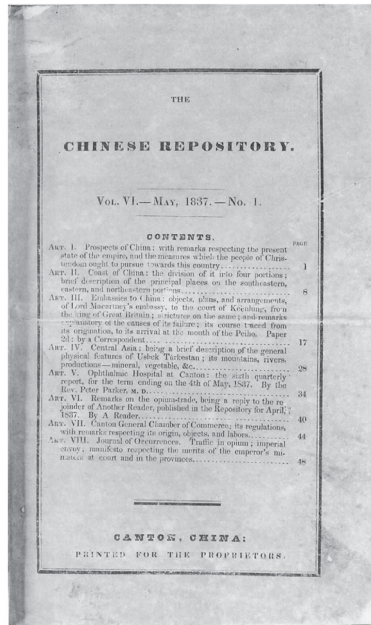
と述べている。しかし、岩井が『リポジトリ』を復刻する際に、「再版本を以て」復刻を行ったと述べられているが、丸善の復刻版を東洋文庫モリソン文庫所蔵の『リポジトリ』と対照比較すると、特に丸善の復刻版の第3巻には、日本語活字が使用されていないため、それは第二版でなく、實質上第一版に基づいた復刻であることがわかる。

そして内容と印刷という版本問題に関して、もちろん、第一版と第二版の内容を一瞥すると、その差異は概ね岩井の考えた通りである。しかし、岩井は両版本の具体的な差異に関して分析するまでには至らなかつた。また、第一版と第二版という版本問題の他に、『リポジトリ』の印刷形態は「単行本」と「合本製本」

という二種類があることに関して、岩井も説明をしなかった。

月刊誌としての『リポジトリー』は、一般的にその出版が月に一回とされている。例えば、東洋文庫モリソン文庫所蔵の号ごとに表紙を有している第6巻（番号：洋 XVIII B-a 70）（図7）は即ち単行本の月刊誌として製本されたものである。

図7 第6巻第1号（番号：洋 XVIII B-a 70）の表紙



また『リポジトリー』が出版される際には、毎巻の第12号の出版に伴い、当該巻の第1号から第12号までを含めた合本製本を巻として出版されていることがある<sup>30</sup>。例えば、東洋文庫モリソン文庫所蔵の『リポジトリー』（番号：洋 XVIII B-a 70）において、第1巻から第5巻までの各号では表紙がなかったため、単行本であるかどうかを確認するのは困難である。しかし、第6巻から第20巻まで（第8巻と第18巻欠）は号ごとに表紙が装幀されているため、すべてが後から製本された単行本であることがわかる。そして製本の様式から見ると、『リポジトリー』（番号：洋 XVIII B-a 70 (b)) は全巻が合本製本であることがわかる。

『リポジトリー』には第1巻から第3巻までが再版されたという版本問題および、出版時において単行本と合本製本という印刷形態の問題がある。ところで、このような問題に対する不注意で、近年一部の復刻版においては、底本の版本の確認に困難が生じる問題が見られる。例えば、香港浸会大学所蔵『リポジトリー』に基づき、2008年に出版された顧鈞と楊慧玲の整理した21巻の『中國叢報＝



Chinese Repository』（影印版）<sup>31</sup>は、雑誌の全文章のタイトルを中国語に翻訳したため、中国語の研究者に便宜を与えているという利点がある。とはいえ、この影印版が復刻される際には、『リポジトリ』の全巻号の本来の表紙が印刷に省略されているという問題点がある。『中國叢報 = Chinese Repository』（影印版）を東洋文庫モリソン文庫所蔵の『リポジトリ』と比較すると、顧鈞と楊慧玲が復刻した第1巻から第3巻までは、3巻とも第二版であることが確認できた。しかしそのためには、本来の内容と比較しない限り、この影印版のみで『リポジトリ』の版本問題および印刷形態の問題を確認するのは困難である。

以下は東洋文庫モリソン文庫所蔵の両版本の『リポジトリ』、即ち第1巻から第3巻までの比較を通じて、印刷と内容の差異を説明する。

### Ⅲ. 『リポジトリ』の第一版と第二版の比較

『リポジトリ』の両版本の印刷と内容差異の問題に関しては、主に印刷道具の有無と変更による差異、文字と記号の添削、挿絵と地図など挿入頁の変更があげられる。即ち、(1) 活字と組版、(2) 文字と記号、(3) 挿入頁、の3点である。

#### 1. 活字と組版

前記の岩井大慧の論述のように、第一版と第二版の最も大きな差異は行と行や字と字の間隔、および漢字の挿入の有無と考えられる<sup>32</sup>。ところが、岩井が目しなかったのは、その差異の原因に関して、第一版が出版されていた初期段階に、カントン印刷所では、ダイアクリティカル・マーク活字と漢字活字がまだ所有されていなかったという点である<sup>33</sup>。

まずは漢字活字の利用問題に関して、『リポジトリ』の初代編集者であるブリッジマンによると、カントン印刷所で使用された初期の漢字活字はイギリス宣教師サミュエル・ダイア (Samuel Dyer, 1804-1843) によるものであると考えられる<sup>34</sup>。そして1843年には、カントン印刷所が1842年にイギリス東インド会社から漢字活字を入手した記録が残されている<sup>35</sup>。また、1856年の時点、カントン印刷所は複数種類の漢字活字を保有していることが確認できた<sup>36</sup>。漢字活字の利用に関しては、例えば第3巻第1号に使われている漢字活字を第一版(図8)と第二版(図9)を比較すると、明らかに異なる漢字活字が使用されていると見て取れる<sup>37</sup>。

図8 第3巻第1号(第一版)、32頁

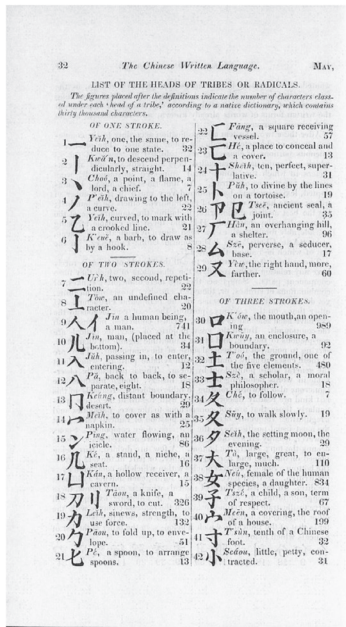
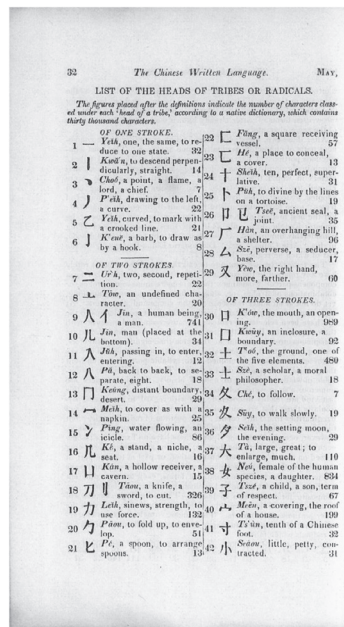


図9 第3巻第1号(第二版)、32頁



また、再版される際に行われた漢字活字の差替えの一方、漢字活字の入手に伴い、第二版においては、第一版の漢字がない文章に、漢字が追加印刷されている場合もある(図10と図11)。

図10 第2巻第3号(第一版)、136頁

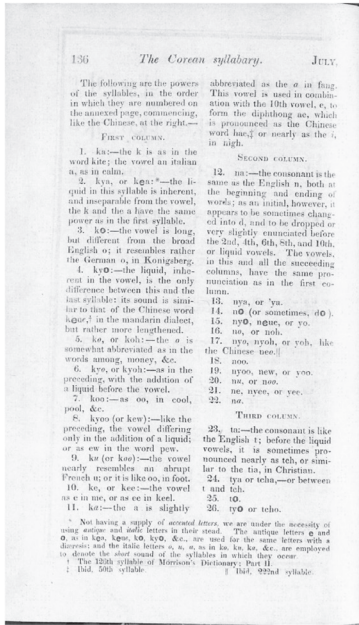


図11 第2巻第3号(第二版)、136頁

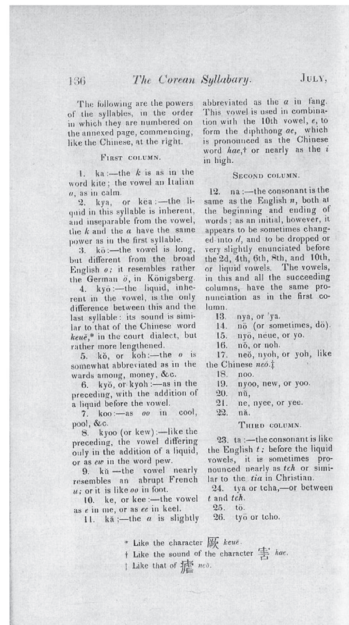


図12 図10の部分拡大

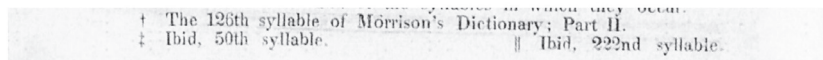


図13 図11の部分拡大

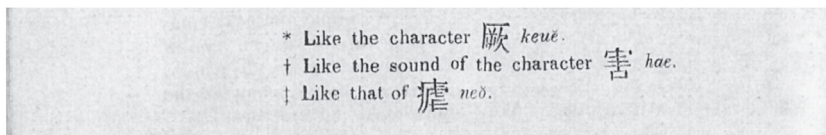


図12と図13に示すように、漢字がない第一版においては、例えば「The 126th syllable of Morrison's Dictionary; Part II」のように、読者に辞書を引かせて実際の漢字はどのような文字であるかを参照させる方法が使われている。それに代わり、すでに漢字活字を有している第二版では、「Like the character 厥 *keuë*」、とそのまま活字で漢字を表すことが可能となったため、辞書を引かせるような説明文が省かれたと考えられる。

少数の漢字の追加は組版の調整、即ち行間・行数・字送りなどの調整により、ページ全体の文字数を変えずに済ませることができる。しかし大量の漢字が追加された場合は、ページに入り切れない文字が次の頁に移され、また次の頁の組版も調

整されなければならないことになる（図14と図15）。

図14 第1巻第8号（第一版）、301頁

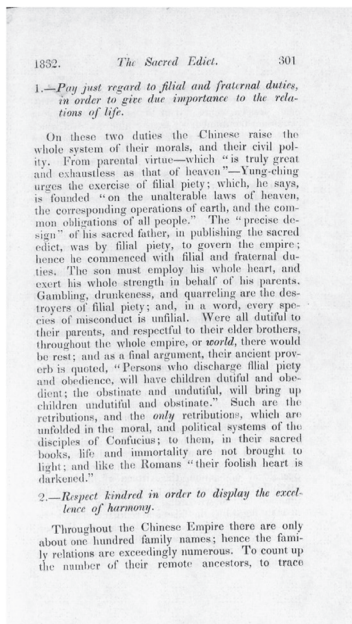
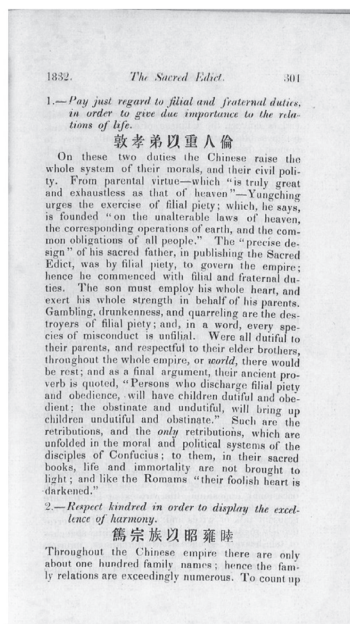


図15 第1巻第8号（第二版）、301頁



もちろん、漢字の部分のみならず、英語の部分も英語活字と組版の調整により、一部の文章においては毎頁に一行から数行程度のずれが生じるという問題がある。例えば第3巻第2号の「Art. III. Chinese Pirates: Ching Chelung; his son Ching Ching-kung; combination of gangs in 1806; narratives of J. Turner and Mr. Glasspoole; Chinese and Portuguese join their forces against the pirates; divisions among them, and their submission to Government」は英語のみの文章であるが、第二版において英語活字と組版が調整されたことにより、行間・行数・字送りが第一版よりずれている部分がある。具体的に、第二版においては、第一版と同じ内容が頁ごとに約一行から数行の程度に次の頁に移されていたという問題が生じている。

また、組版の調整により、字と字や行と行の間隔が調整された場合は、印刷の際に使われている一部の折丁記号にも変化が生じている。例えば、第一版第2巻201頁の「2B」から第二版第2巻201頁の「B2」に、また記号なしの第一版第2巻569頁から第二版第2巻569頁の「3W」に、という折丁記号の変化と追加により、組版の調整は見る事ができる。

そして漢字と英語の組版調整の他には、ダイアクリティカル・マーク活字と日

本語活字の入手によるダイアクリティカル・マーク活字の差替え(図16と図17)<sup>38</sup>と日本語活字(図18と図19)<sup>39</sup>の追加印刷という変更点もある。

図16 図10の部分拡大

13.	nya, or 'ya.
14.	n $\odot$ (or sometimes, d $\odot$ ).
15.	ny $\odot$ , n $\odot$ eue, or yo.
16.	no, or noh.
17.	nyo, nyoh, or yoh, like the Chinese ne $\odot$ .
18.	n $\odot$ .
19.	nyoo, new, or yoo.
20.	nu, or noo.
21.	ne, nyee, or yee.
22.	na.

図17 図11の部分拡大

13.	nya, or 'ya.
14.	n $\ddot{o}$ (or sometimes, d $\ddot{o}$ ).
15.	ny $\ddot{o}$ , n $\ddot{e}$ ue, or yo.
16.	n $\ddot{o}$ , or noh.
17.	ne $\ddot{o}$ , nyoh, or yoh, like the Chinese ne $\ddot{o}$ .‡
18.	n $\ddot{o}$ .
19.	nyoo, new, or yoo.
20.	n $\ddot{u}$ ,
21.	ne, nyee, or yee.
22.	n $\ddot{a}$ .

図18 図5の部分拡大

SOUNDS OF THE JAPANESE ALPHABET.		
1	i	17 re le
2	ro	18 so zo
3	ha fa ba pa	19 tsoo dsoo
4	ni	20 ne
5	ho fo bo po	21 na
6	he fe be pe	22 ra la
7	to do	23 moo
8	tsi dsi	24 woo oo
9	ri li	25 i wi
10	n $\odot$	26 no
11	roo loo	27 o
12	woo o	28 kfoo gfoo
13	wa	29 ya
14	ka ga	30 ma
15	yo	31 ke ge
16	ta da	32 foo hoo boo poo
		33 ko go
		34 e ye
		35 te de
		36 a
		37 sa za
		38 ki gi
		39 yu
		40 me
		41 mi
		42 si zi
		43 ye e
		44 fi hi bi pi
		45 mo
		46 se ze
		47 soo zoo
		48 n.

図19 図6の部分拡大

SOUNDS OF THE JAPANESE SYLLABARY.								
1	イ	i	17	レ	re le	33	コゴ	ko go
2	ロ	ro	18	ソグ	so zo	34	エ	e ye
3	ハババ	ha fa ba pa	19	ツツ	tsoo dsoo	35	テテ	te de
4	ニ	ni	20	子	ne	36	ア	a
5	ホボボ	ho fo bo po	21	ナ	na	37	サザ	sa za
6	ヘベヘ	he fe be pe	22	ラ	ra la	38	キギ	ki gi
7	トド	to do	23	ム	moo	39	ユ	yu
8	チヂ	tsi dsi	24	ウ	woo oo	40	メ	me
9	リ	ri li	25	井	i wi	41	ミ	mi
10	ヌ	n $\odot$	26	ノ	no	42	シジ	si zi
11	ル	roo loo	27	オ	o	43	エ	ye e
12	ヲ	woo o	28	クゾ	kfoo gfoo	44	ヒビヒ	fi hi bi pi
13	ワ	wa	29	ヤ	ya	45	モ	mo
14	カガ	ka ga	30	マ	ma	46	セゼ	se ze
15	ヨ	yo	31	ケゲ	ke ge	47	ソズ	soo zoo
16	タダ	ta da	32	フブ	foo hoo boo poo	48	ン	n.

## 2. 文字と記号

文字と記号の変更点に関しては、主に (i) 大文字と小文字の修正、(ii) 引用符の追加、(iii) 内容に影響を与えない英語単語の綴り方と文中の単語に対する位置の調整、(iv)、英語の綴り誤りの修正、(v) ローマ字表記法の変更、(vi) 理解の変化による言葉の修正、(vii) 文章の一部の内容の修正、(viii) 注の添削、(ix) 数字の修正、などがある。以下にそれぞれの変更点の例をあげる。

### i. 大文字と小文字の修正

(例一)

(第一版第1巻9頁) Does not this favor the late De Guignes' supposition, that the Chinese were originally a Colony from Egypt?"

(第二版第1巻9頁) Does not this favor the late De Guignes' supposition, that the Chinese were originally a colony from Egypt?" (下線部は変更点、以下同様)

(例二)

(第一版第1巻32頁) In Canton province, the scene of his early debauchery and disgrace, he afterwards appeared as Criminal Judge, and then as Foo-yuen. He afterwards became the Governor of the two 'Lake provinces,' i.e. Hoopih and Hoonan. And eventually he settled down in Peking as a President of the College Han-lin-yuen.

(第二版第1巻32頁) In Canton province, the scene of his early debauchery and disgrace, he afterwards appeared as criminal judge, and then as fooyuen. He afterwards became the governor of the two 'Lake provinces,' i.e. Hoopih and Hoonan. And eventually he settled down in Peking as a president of the Hanlin yuen.

例一と例二に示すように、大文字と小文字の修正は、主に固有名詞であるか否かによる変更であると思われる。ただし、例二の「Foo-yuen (=> fooyuen)」と「College Han-lin-yuen. (=> Hanlin yuen)」は後述の項目 (v) と (vi) にあたる。

### ii. 引用符の追加

(例三)

(第一版第2巻41頁) In giving a report of our labors here during the present year, (後略)

(第二版第2巻41頁) “In giving a report of our labors here during the present year, (後略)

例三に示すように、引用符の追加について、例えば、第2巻第1号の「Religious Intelligence- Malacca」（41-45頁）においては、ジェイコブ・トムリン（Jacob Tomlin, 1793-1880）の文章「中国人とマライ人の学校」（Chinese and Malay schools）を引用する時、第一版では引用符を付けなかったが、第二版では引用符を追加することにより、文章が引用であることを示している。

### iii. 内容に影響を与えない英語単語の綴り方と文中の単語に対する位置の調整

（例四）

（第一版第1巻51頁）They have been greatly improved by their intercourse with the Chinese, to whose Emperor they are accustomed to send regular tribute, by the hands of an ambassador.

（第二版第1巻51頁）They have been greatly improved by their intercourse with the Chinese, to whose emperor they are accustomed to send regular tribute, by the hands of an embassador.

（例五）

（第一版第1巻116頁）They are required to deliver into the imperial coffers a fixed number of pearls, annually.

（第二版第1巻116頁）They are required to deliver annually into the imperial coffers a fixed number of pearls.

例四と例五に示すように、英語単語の綴り方と文中の単語に対する位置の調整は文の意味に影響を与えていない。

### iv. 英語の綴り誤りの修正

（例六）

（第一版第1巻42頁）We shall briefly notice each of these topics, which may be again introduced and discused in a futute number of this work. Reverting them to the question,（後略）

（第二版第1巻42頁）We shall briefly notice each of these topics, which may be again introduced and discussed in future numbers of this work. Referring them to the question,（後略）

（例七）

（第一版第1巻257頁）The walls of the upper rooms bear several small niches full of carved idols, which make a pretty kind of checker.

（第二版第1巻257頁）The walls of the upper rooms beat several small

niches full of carved idols, which make a pretty kind of checker.

例六と例七に示すように、第二版では、第一版の英語の綴り誤りを修正した部分がある。

#### v. ローマ字表記法の変更

(例八)

(第一版第1巻35頁) It was, probably, when Tonquin, Cochinchina, and the neighbouring countries were subdued, and forcibly colonized, by the arms of this dynasty, that the name was spread throughout the Indo-chinese nations, and thence found its way over India and Persia, to the countries of the west.

(第二版第1巻35頁) It was, probably, when Tungking, Cochinchina, and the neighboring countries were subdued, and forcibly colonized, by the arms of this dynasty, that the name was spread throughout the Indo-Chinese nations, and thence found its way over India and Persia, to the countries of the west.

(例九)

(第一版第2巻114頁) Heen-tsung

(第二版第2巻114頁) Heëntsung

(Heen-tsung (= > Heëntsung) は即ち唐憲宗 (778-820))

(例十)

(第一版第1巻355頁) Ta-tsing hwuy-teen

(第二版第1巻355頁) Ta Tsing Hwuy-teën

(Ta-tsing hwuy-teen (= > Ta Tsing Hwuy-teën) は即ち『大清会典』)

例八の「Indo-chinese nations (= > Indo-Chinese nations)」と「neighbouring (= > neighboring)」は項目 (i) と (iii) にあたる。そしてローマ字表記法の変更について、例八の「Tonquin (= > Tungking)」は東京／トンキン (今日のベトナム北部に相当) の異なる綴り方である。また、例九と例十は、ダイアクリティカル・マーク活字の入手により、表記が変化したものであり、漢字の固有名詞が単一文字から単語として理解されるようになったことによって生じた変化でもあると考えられる。例えば、例九は人名という固有名詞であるため、第二版においてはハイフンで人名を表現する方法を用いず、一つの単語で人名を表すと変化していると考えられる。そして例十は項目 (i) と (vi) にもあたる。また、「Ta-tsing」(大清) が本来第一版で一つの単語として理解されていたが、第二版においては「大」が形容詞として使用され、「Ta」(大) と「Tsing」(清) が二つの独立の単



語として理解されている。更に、例十もまた書名という固有名詞であるため、第二版において「Ta-tsing hwuy-teen (=> Ta Tsing Hwuy-teën)」の「H」が大文字に変化したと考えられる。

#### vi. 理解の変化による言葉の修正

(例十一)

(第一版第2巻68頁) On account of the inconvenience which would attend the payment of large sums in their coin, or which they have only one kind, (the le, or “cash,”) and as paper currency is not in use, ingots of silver, of one and of ten Chinese ounces (leangs or taels) weight, are used in payments to government.

(第二版第2巻68頁) On account of the inconvenience which would attend the payment of large sums in their coin, of which they have only one kind (the tseën, or cash), and as paper currency is not in use, ingots of silver, of one and of ten Chinese ounces (leäng or taels) weight, are used in payments to government.

(例十二)

(第一版第2巻84頁) His works, as well as those of Confucius, constitute a part of the writing commonly called the four books.

(第二版第2巻84頁) His works, as well as those of Confucius, constitute a part of the writings commonly called the Four Books.

例十一と例十二に示すように、中国に対する理解の変化による言葉の修正は異なる意味をもたらしている。例十一の場合、例えば『モリソン辞書』を参照すると、「CASH, money, 銀両 yin leang. Cash, the Chinese coin 錢 tsëen; 銅錢 tung tsëen. When numbering them called 釐 le, or 厘 le, and 文 wan, as, Ten cash make a candareen, 十厘為一分 shih le wei yih fun.」<sup>40</sup>と「Cash」の翻訳は「tsëen (例十一は tseën)」と「le」の両方とも通用する。しかし『モリソン辞書』によると、両者には差異があり、前者が名詞、そして後者が助数詞を意味する。そして、トレマ「ë」の位置については当時文章の著者のローマ字表記法に対する応用、あるいは印刷所が字を拾う時に間違っただけを反映していると考えられる。また「leangs (=> leäng)」に関しては項目 (v) にもあたる。しかし「s」が取られたのは複数形から不可算名詞とする「leäng」へと理解が変化したためと考えられる。そして例十二の「four books (=> Four Books)」は項目 (i) と (v) にもあたる。しかし、その小文字から大文字への切り替えは「4冊の本」から『四書』、即ち『大学』、『論語』、『孟子』、『中庸』、と理解されるようになったことで修正を施した

ことと考えられる。

### vii. 文章の一部の内容の修正

(例十三)

(第一版第3巻207頁) 5) In a subsequent number of our work, we hope to lay before our readers both forms of the alphabet, together with specimens of the Japanese writing; we can here give only the sounds of the forty-eight letters as they are represented in the European character. A slight change in the form of some of the letters, alters their pronunciation; these changes will be distinguished from the sound of the leading forms by being in Roman, while the former are in Italic letters.

(第二版第3巻207頁) In a subsequent number of our work, we hope to lay before our readers both forms of the alphabet, together with specimens of the Japanese writing; we can here give only the katakana forms of the forty-eight syllables, and their pronunciation A slight addition to some of the syllables alters their pronunciation, and this change from the sound of the leading form is written in Roman, while the former are in Italic letters.

例十三に示すように、前述各項目に説明した文字と引用符の修正の他に、文章の一部の内容は修正が施されている場合もある。例十三のように、文章の意味を妨げない範囲の修正の他には、例えば、第一版において日本語のカナ文字が「the sounds of the forty-eight letters」と説明しているが、第二版では「the *katakana* forms of the forty-eight syllables」と編集者がカナ文字の片仮名を認識できているのみならず、カナ文字が文字の「letters」でなく、音節の「syllables」として再認識されたことがわかる。

### viii. 注の添削

(例十四)

(第一版第1巻384頁) Postscript- Saturday, January 19th. These pages go to press to-day. Thus far during the month, the weather has been remarkably changeable; on the 17th, we had showers of rain, accompanied with thunder and lightning; but now (12 o'clock), though the heavens are partly over-cast with white clouds, we have a little sunshine, a good, keen air, with a light breeze from the north.

The mercantile business of Canton, for the current season, is drawing rapidly

to a close; and most of the ships, say three fourths, are already despatched.

（第二版第1巻384頁）[削除]

（例十五）

（第一版第2巻136頁）8) Not having a supply of accented letters, we are under the necessity of using antique and italic letters in their stead. The antique letters **e** and **o**, as in *ke**e***, *ke**ue***, *ko*, *ky**o***, &c., are used for the same letters with a diæresis; and the italic letters *o*, *u*, *a*, as in *ko*, *ku*, *ka*, &c., are employed to denote the *short* sound of the syllables in which they occur.

（第二版第2巻136頁）[削除]

例十五に示すように、漢字とダイアクリティカル・マーク活字の入手に伴い、それに関する漢字とローマ字表記を直接に活字で表現することができるようになったため、第二版においては本来必要な説明文が省略、あるいは削除されるようになっている。しかし例十五と異なり、例十四のように、第一版の出版当時に添付された記事は第二版において削除されている場合がある。具体的な理由は不明であるが、おそらく編集者であるウィリアムズが述べているように、「多数の比較的重要でない文章を除去する方がよい」<sup>41</sup>、という理由で記事が削除されたのではないかと考えられる。

#### ix. 数字の修正

（例十六）

（第一版第1巻243頁） Mr. Stevens embarked at Philadelphia, on board the ship Morrison, about the last of June, and arrived in China on the 24th instant, after a voyage of 116 days.

（第二版第1巻243頁） Mr. Stevens embarked at Philadelphia, on board the ship Morrison, about the last of June, and arrived in China on the 24th instant, after a voyage of 119 days.

（例十七）

（第一版第2巻390頁） The *first*, comprehends the Malayan peninsula, Sumatra, Java, Bali, Lombok, and about two thirds of the western part of Borneo, up to the parallel of longitude 116° east.

（第二版第2巻390頁） The *first*, comprehends the Malayan peninsula, Sumatra, Java, Bali, Lombok, and about two thirds of the western part of Borneo, up to the parallel of longitude 216° east.

例十六と例十七に示すように、文字と記号の他には、数字が修正された場合もある。例十六において、例えば『アメリカン・ボードのカントン・ミッション記録』では、「Stevens」（即ちエドウィン・ステイーブンス（Edwin Stevens, 1802-1837）を指す）がフィラデルフィアから乗船したのは1832年6月29日、そして中国に上陸したのは1832年10月26日と記している<sup>42</sup>。『アメリカン・ボードのカントン・ミッション記録』の10月26日と例十六の「24th instant」、即ち10月24日との間には3日の誤差があるため、それは例十六の「116（=> 119）」という変更が行われた理由ではないかと考えられる。また、例十七において、経度は東経116度から東経216度に修正されている。しかし東経の最大値は180度であるため、それは間違った数字に修正したもの、あるいは誤って修正を施したものと考えられる。

もちろん、全ての数字の修正は、例十六と例十七のように必ずしも理由と問題点を推測できるものではない。この点には注意を払う必要がある。

### 3. 挿入頁

上述の項目（1）活字と組版と（2）文字と記号とは異なり、第一版と第二版の挿入頁（例えば文字記号の様式集と地図など）を比較したところ、内容の大きさ、印刷のスタイル、線の太さなど、添削されたところは見当たらなかった。それは、挿入頁が主に平版印刷術を用いて印刷され、第一版と第二版とも同じ版が使用されているためと考えられる。ただし、第一版と第二版の一部の挿入頁は異なる頁の間に装幀されているという問題がある。それはおそらく第二版が装幀されている際に第一版の挿入頁を「正確」に参照しなかったためと思われる。

## IV. おわりに

上述のように、東洋文庫モリソン文庫所蔵の二種類の『リポジトリー』に基づいて、第二版を有している巻号は第1巻から第3巻までの3巻のみであることがわかる。そして、漢字活字と日本語活字の利用という理由に基づき、第二版の3巻が再版された出版地はアメリカでなく、中国である可能性が高い。更に、第二版の出版年に関しては、第1巻と第2巻が1837年前後であり、第3巻が1848年、またはそれ以降であると考えられる。また、『リポジトリー』が出版される際には、二種類の印刷形態、即ち「単行本」と「合本製本」があることが確認できた。

次に、第一版と第二版の版本問題に関しては、その内容と印刷の比較を通じて、その変化がわかる。まず、『リポジトリー』の印刷出版において、活字の有無はもちろん近代期における西洋印刷技術と中国印刷技術のインダーアクションに繋

がる一方、それもまた西洋人がどのように英語を用いて漢字を表現するかおよび中国語と日本語などのローマ字表記法の発達史に繋がっている。印刷出版の版本問題に対する不注意は、漢字、日本語、ダイアクリティカル・マークなどの活字の出現およびローマ字表記法の発展を前倒すという判断が生じる可能性がある。

さらに、『リポジトリ』の内容に関しては上述の例に示したように、第二版の出現はある程度、西洋人の東洋知識と言語（中国、日本、韓国などが含まれる）に対する理解が深まった過程を反映する。内容の版本問題に対する不注意は、特に両版本を比較せずに利用すれば、当時の西洋人の東洋研究、または言葉、文章、数字の修正に対する誤判断が生じる可能性がある。

しかしながら、『リポジトリ』の版本問題の影響、即ち第二版の出版経緯と目的がどのように『リポジトリ』の位置付けに影響を与えたか、特にアヘン戦争前後の西洋人の東洋情報の需要に対して、『リポジトリ』の第二版がその需要を満たしたかどうかについて、その検討は、今後の課題である。

[付記] 本研究は JSPS 科研費 22KJ2999 の助成を受けたものである。

#### 注

- 1 一般的に、中国における最初の英字雑誌は 1831 年にマカオで創刊された『ザ・カントン・ミセレイニィ』（*The Canton Miscellany*）と思われる。詳細は、蘇精『鑄以待刻：伝教士と中文印刷変局』（台北：国立台湾大学出版中心、2014 年）、62-63 頁、を参照のこと。
- 2 寄稿者は主に当時カントンとマカオを拠点とする欧米宣教師と商人である。
- 3 *A General Index of Subjects Contained in the Twenty Volumes of the Chinese Repository; with an Arranged List of the Articles* (Canton, 1851).
- 4 “Introduction”, *Chinese Repository*, Vol. 1, No. 1 (May 1832), p. 2. 本稿における『リポジトリ』の引用は特記しない限り、原則的に第一版を引用すること。
- 5 王樹槐「衛三畏与『中華叢刊』」『現代学苑』第 1 卷第 7 号（1964 年 10 月）、17 頁。
- 6 Elizabeth L. Malcolm, “*The Chinese Repository* and Western Literature on China 1800 to 1850”, *Modern Asian Studies*, Vol. 7, No. 2 (1973), p. 178.
- 7 顧鈞、楊慧玲整理「前言」『中国叢報 = Chinese Repository』第 1 卷（桂林：広西師範大学出版社、2008 年）。
- 8 Elizabeth L. Malcolm, “*The Chinese Repository* and Western Literature on China 1800 to 1850”, p. 167.
- 9 *Ibid.*, pp. 169-170.
- 10 例えば、鈴木武「*Chinese Repository* について」『Cosmica』第 15 号（1985 年）、1-13 頁；第 16 号（1986 年）、9-26 頁；第 17 号（1987 年）、34-47 頁；尹文涓「『中国叢報』与 19 世紀西方漢学研究」『漢学研究通訊』第 22 卷第 2 号（2003 年 5 月）、28-36 頁；Jin Cheng, “Orientalism and Representations of China in the Early 19th Century: A Case Study of the *Chinese Repository*” (Ph.D. dissertation, Durham University, 2019)、などがある。
- 11 「第一版」の表紙において、「First Edition」という単語が印刷されていないものの、「第二版」との区別をするため、本稿は便宜上最初の版本を「第一版」と称したい。
- 12 例外として、例えば、岩井大慧は両版本の組版が異なっている部分を紹介した。また蘇哲誠は、第一版出版の時に存在しなかった日本語活字が第二版出版の際に使用されているこ

- とを説明した。岩井大慧監修『支那叢報解説』第1巻(丸善、1942年)、16頁;蘇哲誠「初期在華アメリカ人宣教師の幕末日本研究とその影響: S・W・ウィリアムズの場合」(関西大学修士論文、2021年)、46-47頁。
- 13 *The Chinese Repository*、東洋文庫モリソン文庫所蔵、番号: 洋 XVIII B-a 70; 18冊; 第8巻と第18巻欠。
  - 14 *The Chinese Repository*、東洋文庫モリソン文庫所蔵、番号: 洋 XVIII B-a 70 (b); 20冊。
  - 15 Anonymous, “European Periodicals beyond the Ganges: Prince of Wales’ Island Gazette; Malacca; Periodical Miscellany; Singapore Chronicle; Singapore Free Press; Chronica de Macao; Macaista Imparcial; Canton Register; Canton Press; and Chinese Repository”, *Chinese Repository*, Vol. 5, No. 4 (Aug. 1837), p. 159.
  - 16 Samuel Wells Williams to William Williams, Canton, 1834/05/31. 顧鈞、宮澤眞一編『美国耶魯大学図書館蔵衛三畏未刊往來書信集』第19巻(桂林: 広西師範大学出版社、2012年)、67-68頁。
  - 17 Samuel W. Williams to William Williams, Canton, 1835/03/21. 顧鈞、宮澤眞一編『美国耶魯大学図書館蔵衛三畏未刊往來書信集』第19巻、100-101頁。
  - 18 Samuel W. Williams to William Williams, Canton, 1835/06/02. 顧鈞、宮澤眞一編『美国耶魯大学図書館蔵衛三畏未刊往來書信集』第19巻、106-108頁。
  - 19 Elijah C. Bridgman to Rufus Anderson, Whampoa, 1836/04/07, “Papers of American Board of Commissioners for Foreign Missions” (以後、ABCと称す)、16.3.8, Vol. 1.
  - 20 Samuel W. Williams to William Williams, Canton, 1837/04/27. 顧鈞、宮澤眞一編『美国耶魯大学図書館蔵衛三畏未刊往來書信集』第19巻、183-184頁。
  - 21 Elijah C. Bridgman and Samuel W. Williams, “Editorial Notice”, *A General Index of Subjects Contained in the Twenty Volumes of the Chinese Repository; with an Arranged List of the Articles* (Canton, 1851).
  - 22 [Copy] Samuel W. Williams to Henry Blodgett, New Haven, 1879/03/21. 顧鈞、宮澤眞一編『美国耶魯大学図書館蔵衛三畏未刊往來書信集』第22巻、279頁。
  - 23 蘇哲誠「初期在華アメリカ人宣教師の幕末日本研究とその影響: S・W・ウィリアムズの場合」、46-47頁。
  - 24 岩井大慧監修『支那叢報解説』第1巻、6-8、15-16頁。
  - 25 宮澤眞一「伝道印刷者S・W・ウィリアムズのマカオ生活-月刊雑誌*Chinese Repository* (1832-51)の運営を中心とする一考察-」『埼玉女子短期大学研究紀要』第17号(2006年3月)、39頁。
  - 26 『支那叢報復印版』15巻(丸善、1941-1943年)。
  - 27 岩井大慧監修『支那叢報解説』15巻(丸善、1942-1944年)。
  - 28 岩井大慧監修『支那叢報解説』第1巻、7頁。また、岩井大慧が述べている「編纂者のモリソン」はおそらくロバート・モリソン(Robert Morrison, 1782-1834)を指しているであろう。ただし、ロバート・モリソンは実際に『リポジトリー』の編纂者でないことをここで特記したい。
  - 29 Ibid., p. 16.
  - 30 唯一の例外、1840年の第9巻は8号のみである。それは第9巻までの第1号の出版月が5月である。1841年に出版月の巻号を洗い直すため、第10巻以降は毎年の一月を該巻の第1号として出版することになった。
  - 31 顧鈞、楊慧玲整理、『中国叢報 = Chinese Repository』21巻、影印版(桂林: 広西師範大学出版社、2008年); また、この影印版が香港浸会大学蔵本による根拠は、李秀清『中法西譯: 『中国叢報』与十九世紀西方人的中国法律觀』(上海: 上海三聯書店、2015年)、5頁。そして、顧鈞と楊慧玲は1851年出版の『General Index』を『リポジトリー』の第21巻としている。しかし、実際には、『リポジトリー』に「第21巻」が存在しない。
  - 32 岩井大慧監修『支那叢報解説』第1巻、16頁。

- 33 カントン印刷所の詳細については、J. F. Coakley, “Printing Offices of the American Board of Commissioners for Foreign Missions, 1817-1900”, *Harvard Library Bulletin*, Vol. 9, No. 1 (Spring 1998), pp. 23-26: 譚樹林「美部会在華第一間印刷所－布魯恩印刷所考論」『澳門理工學報』2016年第3期（2016年）、173-184頁、を参照のこと。ただし、ダイアクリティカル・マーク活字と英語活字に関して、両文章とも二種類の活字の詳細を論じなかった。また、カントン印刷所が保有されていた漢字活字に関して、譚はイギリス東インド会社の漢字活字の詳細しか討論しなかった。
- 34 Elijah. C. Bridgman to Anonymus [ABCFM], Canton, 1833/02/16, ABC, 16.3.8, Vol. 1. また、ダイアと漢字活字については、蘇精『馬禮遜与中文印刷出版』（台北：台湾学生書局、2000年）、191-202頁、を参照のこと。
- 35 Samuel W. Williams to Rufus Anderson, Macao, 1843/01/31, ABC, 16.3.8, Vol. 1A.
- 36 “List of Articles & Property Belonging to the Mission of the Amer[ican] Board of Commissioners for Foreign Missions in Canton which Were Destroyed by the Fire of Dec. 14, 1856, in the Burning of the Foreign Factories at Canton”, Samuel W. Williams and Others to Anonymus [ABCFM], 1857/01/02, ABC, 16.3.8, Vol. 2.
- 37 ただし、第一版と第二版において利用されている漢字活字の具体的な類別を解明するにはさらなる調査が必要である。
- 38 具体的に、カントン印刷所はいつダイアクリティカル・マーク活字（例えば、「è」、「ò」、「ü」など）を最初に入手したのかはまだ不明である。しかし、第一版の『リポジトリー』の第2巻第12号（1834年4月）で初めてダイアクリティカル・マーク活字が使われているため、それは遅くも1834年4月以前にすでに入手したと推測できる。
- 39 カントン印刷所の日本語活字の由来に関して、詳細は、蘇哲誠「初期在華アメリカ人宣教師の幕末日本研究とその影響：S・W・ウィリアムズの場合」、29-57頁、を参照のこと。
- 40 Robert Morrison, *A Dictionary of the Chinese Language*, Part III, (Macao: The Honorable East India Company’s Press, 1822), p. 62.
- 41 Samuel Wells Williams to William Williams, Canton, 1834/05/31. 顧鈞、宮澤眞一編『美国耶魯大学図書館蔵衛三畏未刊往來書信集』第19巻、67-68頁。
- 42 “Records of the Mission of the American Board of Commissioners for Foreign Missions, Boston, In China. Organized March 6th, 1836”, ABC, 16.3.11, Vol. 1.

**Abstract:**

## The Edition Problems of *The Chinese Repository* (1832-1851):

Based on First Edition and Second Edition which  
Collected by the Morrison Collections of Tōyō Bunko

Chit Shing SO

*The Chinese Repository* (1832-1851), an English Journal created by American Protestant Missionary, was regarded as one of the prominent sources for the study of Imperial China before and after the Opium War. The former investigations, however, focused on the journal's contents, its management, and the details of its closing. The bibliographical problem, that, *The Chinese Repository* existed First Edition and Second Edition when it was still in publishing, has not yet been enough clarified. It suggests that, the comparative studies between the difference of the printing and contents were insufficient. This paper bases on First Edition and Second Edition which were collected by the Morrison Collections of Tōyō Bunko, firstly, introduces the details of *The Chinese Repository*'s republication and two editions collected by the Morrison Collections of Tōyō Bunko, secondly, compares the difference between the two editions, and lastly discusses the editions problems and its influence of two editions.